



## キリマンジャロの農家経済経営 ——貧困・開発とフェアトレード——

辻村 英之 著

京都 昭和堂 2021年 ix+298p.

本書は、2002年から2013年にかけてのタンザニア・キリマンジャロにおける著者の調査の成果をまとめたものである。中心となるのは、著者が長らくフィールドワークを行ってきたルカニ村である。『南部アフリカの農村協同組合』（日本経済評論社、1999年）や『コーヒーと南北問題』（日本経済評論社、2004年）といった著書がすでに上梓されており、その後の業績をまとめたものとなる。

本書は5部で構成されているが、内容としては、理論編の第I部と調査結果編としての第II部から第V部という形をとる。第I部では本書の分析枠組みを提示している。世界資本主義システムの議論から始まり、センのケイパビリティ・アプローチを分析枠組みの中心におく一方で、アフリカ農村社会の特徴としての互酬性にも注目する。さらにホジソンを中心とした制度派経済学にも言及している。第I部で提示される論点は多岐にわたっており、議論が錯綜している印象は受けるが、貧困と開発の関係に関連するさまざまな概念についての理解を深めるためには有用である。第II部では、ルカニ村の農家の2004年から2005年にかけて断続的に記入された現金出納帳から、どのような経済活動が営まれているのかを明らかにしている。第III部では、調査地におけるコーヒーのフェアトレード活動を解明するとともに、トムモロコシや牛（とくに牛乳）、材木ビジネスなどを含めた複合経営についての調査結果を報告している。第IV部では、生産だけでなく市場や相互扶助システムといった農家を取り巻く制度に着目する。そして第V部では、改めてルカニ村における貧困（著者はこれを「福祉的」貧困と「保障的」貧困に分類する）に対するフェアトレードの効果について検討している。その効果は確認できるものの、限定的であることが示されている。農家の経済活動に対する多面的な分析から明らかになるのは、利益追求と同時に、長年培われてきた互酬性を基盤にして安定した家計を確保することの重要性である。

本書から、農村開発における理論的背景からフェアトレードも含めた農村の複合的経営の実態まで知ることができる。さまざまな概念についての議論が並行して進むため読みやすい内容とはいいがたいが、アフリカの農村社会やコーヒーそしてフェアトレードについて興味のある学生におすすめしたい。

児玉 由佳（こだま・ゆか／アジア経済研究所）

